

帝京長岡・開志学園JSC・日本文理・新潟明訓…高校サッカー特集

NIIGATA Sports Magazine

新潟スポーツ
マガジン スタダード



Standard

2021 Autumn

【秋号】定価1,000円

WEリーグも開幕
アルビレディース選手名鑑

高校サッカー

男女 **70** 校
2,526人 選手名鑑

NIIGATA FOOTBALL CLIMAX

高校
選手
権開
幕

イチバン、獲ります。



新潟明訓

田村建人

DF

TAMURA KENTO

[3年]180cm 69kg 前登録チーム／エボルブFC

反転速攻のキーマン

中盤の底で攻守の切り替えを担う。1年時はセンターバック。昨年はけがを繰り返し満足にプレーができなかった。「もっと攻撃に絡むことが自分の課題。もう一段、チームとして強くなる」。新潟明訓のスピーディーなサッカーの鍵を握る選手だ。



日本文理

齋藤優太

DF

SAITO YUTA

[3年]181cm 73kg 前登録チーム／エボルブFC

経験豊富な守備の要

1年生からベンチ入りし、国体メンバーにも選ばれるなど経験は十分。今年の日本文理の特長の一つが堅守で、その中心となる。1対1に強く、90分間ハードワークする献身的なプレーでディフェンスラインを統率する。

帝京長岡

廣井蘭人

MF

HIROI RANDO

[2年]167cm 54kg
前登録チーム／長岡JYFC



撮影●星野健一 (Office ANDANTE)



撮影●編集部

さらなるブレイクの予感

「(今年)期待しているのは守備と得点」(古沢徹監督)。昨年1年生でブレイクし全国大会も経験。潜在的ポテンシャルが高いからこそ、指揮官はさらなる成長を促す。持ち前のゲームメイク力に得点力と献身的な守備力が備われば、鬼に金棒。「チームの中心、頼りになる存在になりたい」(廣井)。U-17日本代表選手。



アルビレックス新潟 アルベルト監督

からの メッセージ

～自分を信じること～

試合に勝たなければならない、

というプレッシャーに

押しつぶされそうになり、

自分の才能を

発揮できなくなることを避けよう。

自分の力を信じ、

信頼して、

長所をピッチの中で

しっかりと表現してほしい。

文武両道も忘れずに。

ALBERT Puig Ortoneda



©1997 A.N.INC.

新潟県 男女高校サッカー部

70校 選手名鑑

男子

高志中等教育学校	031
万代高校	031
新潟青陵高校	031
東京学館新潟高校	032
新潟高校	033
新潟工業高校	034
新潟江南高校	035
新潟商業高校	035
新潟第一高校	036
新潟西高校	037
新潟東高校	038
日本文理高校	039
新潟明訓高校	040
北越高校	041
開志学園 JAPAN サッカーカレッジ高等部	042
開志国際高校	043
巻高校	044
新潟向陽高校	044
新潟南高校	045
新津高校	045
佐渡高校	046
村上高校	046
村上桜ヶ丘高校	046
敬和学園高校	047
新発田商業高校	047
豊栄高校	047
新発田高校	048
新発田中央高校	048
新発田南高校	049

新津工業高校	050
五泉高校	050
三条高校	050
加茂晩星高校	051
加茂高校	052
加茂農林高校	052
三条商業高校	052
新潟県央工業高校	053
燕中等教育学校(合同 A)	053
栃尾高校(合同 A)	053
見附高校	054
長岡工業高等専門学校	054
長岡農業高校	054
中越高校	055
帝京長岡高校	056
長岡向陵高校	057
長岡大手高校	058
長岡工業高校	058
長岡商業高校	059
長岡高校	059
小千谷高校	060
小千谷西高校	060
六日町高校	060
十日町高校	061
十日町総合高校	061
津南中等教育学校	061
柏崎高校	062
柏崎工業高校	062
高田商業高校	062

新潟産業大学附属高校	063
上越高校	064
上越総合技術高校	065
関根学園高校	065
高田高校	065
新井高校	066
糸魚川高校(合同 B)	066
糸魚川白嶺高校(合同 B)	066

女子

開志学園 JAPAN サッカーカレッジ高等部	067
北越高校	068
国際情報高校	068
帝京長岡高校	069

※ポジション、氏名、学年、身長・体重、前登録チーム名などは学校から提出された資料に基づいて記載しています。
男子の選手権県大会出場は70校・68チームで、栃尾と燕中等、糸魚川と糸魚川白嶺がそれぞれ合同チームを結成しています。
男子の70校・68チームのうち4校・4チームが本誌掲載を辞退されました。

KITAGAWA HIKARU

北川ひかる
14
DF

WEリーグの成功、多様性にあふれた社会へ

女子選手の
認知度を
もっと高めたい

日本女子サッカーの強化、そして女性活躍社会の向上を目的に、11クラブによるプロリーグ「Yogibo WEリーグ」がいよいよ9月12日に開幕する。アルビレックス新潟レディースも初年度のオリジナル11として参加。2018年から中心選手として活躍してきた北川ひかるに懸ける思いを聞いた。

撮影●嶋田健一
文●富高由喜（フリーアナウンサー・ライター）



若手と積極的に話すことでチームを活性化させる役目も担う。アルビに欠かせない存在になっている

——日本初の女子プロサッカーリーグ、WEリーグが開幕します。

「プロリーグ初年度ということで、チームとしてモチベーションを高くトレーニングに臨んでいますし、とてもワクワクしています。昨年から継続して守備を重点的に練習しているので、その積み上げがプレシーズンマッチの3連勝につながったなと思っています。ただ、日テレ（東京ヴェルディ）ベレーザのような強豪相手には、もっと共通理解の下にスキルアップしていかなくてはと感じているのも事実です」

——今季新たに村松大介監督が就任。これまでとの違いは？

「監督が代わっても守備から入っていくチームである点是不会変わらないので、より良い守備をするための練習が一番です。技術面、守備から攻撃への切り替えでは新たに学ぶことが多く、練習量も多いので、ハードワークですがケガなくやれていますね」

——練習中、DF陣に盛んに声かけをしています。意識的ですか？

「自分はどう若い選手ではないことを自覚しています。何かできることはないかと考えた結果、みんなと積極的に話していこうと思いました。このチームをもっと良くしていくために、若い選手とよく話し合って伝えていかなければならないし、自分もプレー面で何か指摘されたら改善していかないと…。そんな思いで誰とでも話しています」

——東京五輪代表（なでしこジャパン）に選出された平尾知佳選手とは中学時代のJFAアカデミー福島から一緒です。

「先輩として尊敬できるし、後ろからかなり支えてくれています。知佳さんには、

五輪、W杯の舞台は、常に見据えている。

女神、覚醒。
enjoy football!

Profile 北川ひかる（きたがわ・ひかる）
◎1997年5月10日生まれ。石川県出身。保育園からサッカーを始める。同県出身選手としては男女通じ初めてJFAアカデミー福島に中学から入校。U-17、U-20など各年代別日本代表に選出。A代表は5試合出場。2016年早稲田大学入学と同時に浦和レッドダイヤモンズレディース（現三菱重工浦和レズレディース）加入。18年シーズン途中で新潟へ移籍。対人の強さと積極的な攻撃参加を武器に左SBとして活躍。インスタフォロワー数はチーム内断トツ。164cm、53kg。利き足は左。



守備もさることながら、スピードに乗ったアグレッシブなプレーを今季も期待されている

「五輪は誰でも行けるところじゃないのでいろんな経験をしてまた教えてほしい」と伝えました。正直、私も東京五輪に行きたい気持ちがありました。代表メンバーに選ばれなかったことはとても残念でしたが、まだまだ私のサッカー人生は続きます。新しい目標を決めつつ、必ず、また代表に入って、五輪、W杯に出たいという気持ちは変わりません」

——世界ではベビシッターを帯同する選手がいたり、アルビレディースには出産を控えるコーチがいたり、女子サッカー界を取り巻く環境が変わってきています。

「子どもがいても選手が続けられるような、自由な選択ができるようになったことはとてもいいことだと思います。WEリーグが成功することで、もっといろんなことにチャレンジしていけるというのを皆さんに見ていただきたいし、WEリーグや女子サッカー選手の認知度をもっと高めたいと思っています。個人的には、なるべく長く現役を続けて、引退してから家族を持ちたいですね」

——プライベートでは料理と美容にハマっているとか…。

「スキンケアを重視していて、最近はス

チームを購入。美顔器も持っています。毎晩欠かせません（笑）。歳を重ねてからシミが増えると嫌なので、日焼け止めは、試合中は必ずハーフトイムで塗り直します。佐伯彩さん（元アルビレックス新潟レディース選手、2019年引退）や、八坂芽依選手（現・AC長野パルセイロ）はじめ、アルビに来てから意識の高い人たちに教わりました。また『料理しなそうだね』とよく言われるのですが（笑）、作り置きなどもしていますし、料理好きです。高タンパクな鶏肉料理に、米、乳製品、果物。料理名は…、秘密です（笑）。試合や練習によって体重がすぐに落ちるので、練習前に必ずバナナを1本食べて栄養補給をし、夜はしっかり自炊して体を整えています」

——チームとして、そして個人としてWEリーグ初年度の目標をお願いします。

「チームの目標は3位以内。個人ではリーグベスト11。自分の良さは積極的に攻撃参加するところ。それを発揮するために守備を意識したい。そして見る方たちには、何よりも頑張る姿、ひたむきにプレーする姿に何かを感じてもらえたらうれしいです。そういうところをしっかりと表現していきたいです」



この夏のインターハイにフライ級で出場した佐野。主将としてチームをまとめながら、文武両道を貫いた



2年生女子で唯一の選手の佐藤は今年、実戦デビュー。来年は県女子のエースとして期待される



1年生部員は基礎から学ぶ。今年の選手としての入部は先合計18人。入部から短期間で進部する選手はほとんどいないという

間は1時間から1時間30分ほど。「日本一短い練習時間です」と笑う。そんな中で88年のインターハイでバンタム級を制した岩橋徹也を始め、多くの名選手を輩出してきた。

「だからだと長くやるのは好きではないのでね」。練習内容は選手の自由。それぞれテーマを持って自分に合わせた練習をする。14人いる女子マネジャーは、選手のリクエストに応じて練習の補助をする。全体練習後、追加で自主練習をする者もいれば、帰宅する者もいる。鶴木は技術的な指導やアドバイスはするが、声を荒げたり、練習内容を強制することはない。「押し付けられた練習をしてもおもしろくないでしょう」。

監督を始めた当初からこの指導方法は変わらない。鶴木は高3時に全国大会で準優勝し、法政大学では主将を務めて68年メキシコ五輪の候補だった。25歳のときに東京

から新潟にUターンし、廃部寸前だった母校の監督になった。スポーツ界全体がスバルタ全盛の時代。そんな中で自主性を重んじた。「自分がやっていた大学の練習を取り入れたんです」。自主自立は大学時代の恩師、渡辺政史の教え。それを実践した。

「1度見て、『あ、入ろう』と思いました」。2年生で唯一の女子選手、佐藤未嘉は言う。中学時代は陸上部。高校では違うスポーツを始めようと入部した。ボクシングは全く知らなかった。ただ、見学したときの雰囲気インパクトがあった。「イメージ的に怖いかなと思っていたんです。でも、練習の合間に笑っている人もいる。明るいって」。入部してから感じたことは「自分で考えることが大切」。基本や技術指導は受けたが、練習メニューは自分で決める。何もしなければ何もできない。与えられるものがないことに最初は戸惑った。ただ、1歩踏み出すことで変化が起きた。「先輩に

自分から聞きに行きました。どんな練習をしたらいいか、うまくするには何をすればいいか。人に頼らず自分から動く。「そうすればやっただけ伸びる」。佐藤は来年春の全国選抜大会出場を目標にしている。

自主性の土台にあるのは「あくまで部活、スポーツの一環」という鶴木のスタンス。勉強と部活の両立で悩んだら勉強を優先させる。迷いがあつてはスポーツを楽しむ。練習時間が短いのは放課後のブライベートを長くするためもある。「1時間ちよつとで終われば、その後に好きなことができるでしょう」。大切なのは高校生活。その一端にボクシングがあればいい。

常設されたリングは半世紀近く、自由闊達（かつたつ）な高校生の活動を支え、足場になってきた。佐野は言う。「将来は教員になりたい。指導者になってボクシングを教えたい。自分が育った雰囲気をつなげていけるように」。リングは次世代の芽を育てる場にもなっている。



14人いるマネジャーは選手をサポートするためにさまざまな役割を担う。部としての一体感が窺える

『自主自立』に共感し、集い、拳を交える。 新潟のボクシング史が刻まれたリング。



ボクシング部 新潟南高校 Niigata Minami High School



ボクシング場の壁に張られた部旗。色あせた様子が歴史を物語る。

近年の少子化、縮小傾向で選手不足に悩む高校の部活動が多い中、異彩を放っているのが新潟南高校ボクシング部。半世紀以上の歴史を持つ県ボクシング界の老舗には、ほぼ毎年20人前後の部員が所属し、全国上位の選手を輩出している。根底には紡がれてきた自主性がある。

撮影●嶋田健一（スタジオ嶋田）
文●編集部

アップテンポのBGMが流れる中、選手はおのののメニューを黙々とこなす。3分刻みで音楽が途切れ、次のメニューに。その合間にはお互いを鼓舞する掛け声が入る。新潟南高校にはボクシング専用の小体育館がある。半分がフロア、もう半分はリング。県内の高校では唯一の常設リング。日本ボクシング連盟が定めた公式サイズのものだ。部員たちはフロアだけでなく、リングに上がってシャドーボクシングやミット打ちに取り組む。

部から唯一一人、この夏のインターハイ（全国高校総体）に出場した佐野太紀（3年）は言う。「このリングでいつも練習ができるのはすごく大きいです」。普段は新潟南の部員たちが使用しているが、公式戦も行われる。インターハイ、国体、選抜の県予選といった高校生の大会のほか、社会人の試合も行われる。持ち回りで開催される北信越大会の舞台にもなる。「練習場所です合ができる。精神的にはかなり助かる」。

それとともに感じているのが新潟のボクシング史。1992年パロセロナ五輪ライトフライ級代表の佐々木忠広、96年アトランタ五輪ライトウェルター級代表の仁多見史隆ら県出身の全国王者、全国大会上位入賞者がこのリングからステップアップしていった。「すごい先輩たちが戦っていた場所」（佐野）。現部員の心の中にはさりげなく歴史が刻まれている。

「楽しくなければやる意味がないんです。ボクシングもスポーツも」。こう話すのは県ボクシング連盟理事長の鶴木良夫。母校の新潟南のボクシング部監督を務めて46年目になる。リング上の勝負、部員たちが流す汗をつぶさに見てきた。新潟南の練習時